

# 巻 頭 言

日本福祉大学大学院社会福祉学研究科長  
『福祉社会開発研究』編集委員長

齊 藤 雅 茂

ここに『福祉社会開発研究』第19号をお届け致します。本号には、社会福祉学分野から論文6本、研究ノート1本が掲載されています。改めまして、掲載された皆さまは誠におめでとうございます。また、査読をご担当頂きました全ての先生方に厚く御礼申し上げます。

本誌では、本学教員による簡易な査読（審査）を行っています。今回の掲載率は38.9%（全18本中7本が掲載）でした。大学が発行する紀要として考えると、採択率はやや低めで、少し掲載が難しめな雑誌のようにみえます。なかには、「論文」として投稿されたものの、「研究ノート」として採択という評価に至ったケースもあるため、希望枠での採択率となるともう少し低くなります。一般的に採択率の低さは、採択された論文の「質」の高さを表す側面もあるため、それ自体の是非には様々な議論があります。しかしながら、本誌に投稿された原稿および評価結果を拝見しますと、研究内容や方法論の「質」というよりも、「得られた結果が当初設定した目的に対応していない」「そもそもの研究目的が明瞭でない」「使用された概念・用語が統一されていない」「文章の遂行不足が目立つ」「論文としての体裁が整っていない」「査読コメントに対して適切に修正・反映できていない」など、学術論文を執筆するうえでの基本的な不備によって、不採択や研究ノートへの降格に至っているケースが多いようです。原稿を執筆される際には、「現状」や「実態」といったある種の「マジックワード」は用いず、当該研究の新規性と得られた具体的な所見とその意義を丁寧に整理しておく必要があるように感じます。加えて、ご投稿前には今一度、学術論文としての基本的な体裁を整えるよう、入念な推敲を重ねて頂けると、良い結果につながりやすくなるものと思います。

昨今、学術雑誌といっても多様な媒体があり、国際的なトップジャーナルへの投稿もより簡便になってきています。投稿する者にとって投稿先の選択肢は益々増加し、多様化しています（その結果として「ハゲタカジャーナル」の問題もありますが…）。他方で、依然として、既存の学術雑誌には投稿しにくい領域やテーマ、トピックがあるのも事実です。この点で、大学が発行する紀要として、本誌が果たす役割は大きいと考えます。今後も福祉社会開発に関わる自由な発表・討論ができる場として、良質な研究成果・学術論文が多数、投稿・掲載されることを祈念しております。お読み頂きました皆さまには、忌憚のないご意見・ご助言を頂けますよう、よろしく御礼申し上げます。